

|             |                                                                               |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| 氏 名         | え ぐち たける<br>江 口 建                                                             |
| 学位(専攻分野)    | 博 士 (地球環境学)                                                                   |
| 学 位 記 番 号   | 地 環 博 第 38 号                                                                  |
| 学位授与の日付     | 平 成 20 年 3 月 24 日                                                             |
| 学位授与の要件     | 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当                                                       |
| 研 究 科 ・ 専 攻 | 地 球 環 境 学 舎 地 球 環 境 学 専 攻                                                     |
| 学 位 論 文 題 目 | 「自我」と「時間」<br>——フッサールの「原－自我 (Ur-Ich)」と「時間化 (Zeitigung)」をめぐる<br>思索の統一的視点からの解明—— |
| 論文調査委員      | (主 査)<br>教 授 小 川 侃 准教授 柏 久 准教授 安 部 浩                                          |

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、20世紀ドイツにおける現象学の創始者エドムント・フッサールの自我論および時間論を手がかりに、「自我」と「時間」の関係を包括的に考察するものである。1905年に始まる初期の『時間講義』と、フッサール晩年に当たる1930年代の「C草稿」については、すでにいくつかの優れた先行研究が公にされている一方で、そのあいだを架橋する重要な中期時間論に関しては、いまだにその全貌が明らかにされているとは言い難い状況がある。そこで本論文は、2001年に世界で初めて公刊された、中期時間論に当たる1917/18年の『ベルナウ草稿』を、前期と後期の自我論ならびに時間論のあいだの溝を埋めるテキストとして位置づけ、前期・中期・後期フッサールにおける「自我」と「時間」の錯綜した関係、ならびに、覚醒した自我意識と、自我が芽生える以前の先－自我的・受動的な時間意識とのあいだの関係を統一的視点から体系的に解明することを課題とした。全体は、序章と終章を含め、6章から成り立っている。

本論文を貫いている問いは、一言で表せば、「自我」と「時間」の関係は一体どうなっているのか、ということである。自我と時間の関係をめぐる問題は極めて困難かつ厄介であり、この問題はフッサール研究者のあいだでも依然として見解が錯綜している。

まず序論として、フッサール現象学の根本事象であり本論文の叙述において鍵となる「内的意識」、「反省」、「時間」という事象群、ならびに、いくつかの現象学的な基礎概念を呈示することで、あらかじめ議論に必要な現象学的な舞台装置を整えた。

それを踏まえたうえで、第一章では、「純粹自我の発生論」という主題のもと、〈いかにして自我が時間性を持つに至るのか〉をテキストの丹念な読解を通じて解明した。一度は『イデーⅠ』において「内在における超越物」と呼ばれ、次いで『イデーⅡ』で「時間的に構成された統一性」として承認された純粹自我が、なにゆえに『ベルナウ草稿』において「無時間的－超時間的」な《作動する原－自我》として捉え直されるに至ったのか、その思考の内在的経緯を探った。その際、フッサールの記述において、自我の〈時間的構成〉と〈原初的発生〉の問題が混在している可能性が浮き彫りになった。そこから、自我の時間性の構成が、自我自身の「反省」による超越論的な「自己時間化」として説明されうること明らかにした。一連の論究により見えてきたのは、1) 自我は、その究極的な作動態にあっては〈内在的時間〉のレベルを超え出てゆくということ、2) したがって、内的時間意識は、原－自我にとっては時間を構成する意識としては通用しないこと、また、3) 『ベルナウ草稿』における反省論が、晩年の「生き生きした現在」の理論に辿り着く内在的可能性を秘めているということである。特に後者の二つの洞察は、従来のフッサール研究においては、ほとんど明確に指摘されてこなかった。

次いで第二章では、原－自我の問題圏を深く掘り下げつつ、『ベルナウ草稿』以降のフッサール自我論の展開を見極めた。その場合、重要となるのが、フッサール晩年の遺稿群「C草稿」である。まず、純粹自我と原－自我との関係を改めて明確にし、次いで、純粹自我が属する「意識流」と、原－自我が作動する場所としての「生き生きした現在」との関係を正確に規定した。そこから、フッサールが原－自我の洞察に辿り着いたゆえんの「生き生きした現在への徹底的還元」、ならびに、

そこから導かれる時間化の《始源》をめぐる問題、そして、自我の「能動的な」時間化と、先－自我的な「流れ」の時間化とのあいだの謎に満ちた関係を、順を追って際立たせていった。その過程で、純粹自我が原－自我として捉え直されていった必然性、また、どうして初期の内的時間意識の理論では事態を説明しきれなくなったのか、が一層明瞭化された。一連の考察の結果、『ベルナウ草稿』における《作動する自我》の洞察が、フッサールが最晩年に密かに構想した《現象学の現象学》につながるということも明らかになった。その場合、作動する原－自我とは、絶えず〈今ここ〉に居合わせつつ現象学という営みそのものを遂行する、目覚めた《現象学する私》に他ならない。この《現象学する私》は、時間が「流れること」すらも〈今ここで〉主題化する《私》というものに具わる否応ない先行性を示唆している。

本章の最後の節では、自我が目覚める以前の「眠った」自我としての「先－自我」を主題として扱った。原－自我と先－自我の関係を正確に規定し、先－自我を触発してくる「原ヒュレー」、ならびに、触発に応じて発動される「原キネステーゼ」的運動のあり方を、受動性の構造を掘り起こしながら分析していった。

キネステーゼという現象が考察の圏内に入ってきた以上、身体の問題を避けて通れないという自覚が申請者には芽生えた。そこで第三章では、フッサールの身体論の解明に着手した。フッサールの身体論を内在的・批判的に検討することで、そこに潜む論理の循環やパラドクスを露呈させ、自我が目覚める以前の「匿名的な」原－身体性の次元を、従来のフッサール解釈の枠組みを超えて開示することを試みた。

第四章では、フッサール自我論の根幹に関わる「自我の同一性」の問題を主題化した。フッサールの議論には、《私》とはいつでもどこでも「同じ一つの」自我であるという洞察が前提されている。そのような信憑が本当に現象学的に確認されるものであるかどうかを、フッサールが想定する「把持」、「連合」、「再想起」という同一性意識の時間構造を詳細に確認しながら検討した。その結果、上記のいずれの働きにも「誤謬」の可能性が存在し、フッサールが考える時間意識の構造には不可避的な「ゆらぎ」があることが判明した。ここから、内在的時間を貫いて持続する統一体と見なされる限りでの純粹自我は、決して確固たる同一性など持ち得ないという結論が導かれる。さらに、内在的時間を超えてゆく原－自我をも射程に入れるならば、原－自我が暗示している「唯一性」、「一回性」は、〈過去〉の自我と〈今この瞬間〉の自我とのあいだの同一性について語ること自体の不可能性を暗示している。それはまた、〈過去〉の私と〈今〉の私が、なぜか今ここで合致しているという奇跡的な「超越論的偶然」のあり方をほのめかしている。

終章では、現象学においてそもそも「誤謬」について語ることがいかなる意味を持ちうるのか、ということ、本論の主題と関わる範囲で、明らかにした。

## 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本学位申請論文は、人間の本質を時間的なものに認めて人間の時間意識および時間的なあり方を徹底的に追求し解明した現象学の哲学を根拠付けたフッサール（Edmund Husserl, 1859－1938）の時間論の研究を主軸にしてフッサールの身体を含めた人間存在の全体についての現象学的思想を解明したものである。人間存在は、時間と空間に身体性を通じて組み込まれておりその意味で身体性を明らかにした部分も重要である。とくに今世紀の初頭になって初めて公刊されたフッサールのいわゆる『ベルナウ草稿』は、時間の構成をめぐるフッサールの隠れた主著と言われるものであり、現在、世界のフッサール研究者が研究しているものである。申請者のこの論文はこの『ベルナウ草稿』を徹底的に解明しており、その意味で世界のフッサール研究の最先端に立つものである。要するに人間存在を時間的な存在者として把握したうえで、それを身体性とさらに含蓄的には空間性をも含めて人間存在の全体性を解明しようとした。本論文の形式上の特徴は次の3点であり、これらは卓越した業績とみなすことができる。第1にフッサールの研究草稿のいわゆる『ベルナウ草稿』を原テキストにもとづき研究し、純粹自我と原自我の発生の問題に向けて解明したこと。このことを通じて後期のフッサール現象学を発生的現象学の観点から首尾一貫して明るみのもとにもたらししたこと。その際にヨーロッパのみならず世界の第一線の国際的なフッサール学者であるダン・ザハヴィそのほかと対決した議論を展開していること。

第2にフッサール時間論の成果を持って自我と身体性、私の同一性の問題に鋭く踏み込んで現象学的に解明したこと。第3に現象学の真理を明らかにする上で考察を欠かすことができない誤謬の問題をもともに考察しており、その意味でも遺漏のない徹底した考察であること。これら3点を中心にして具体的にかつ内容に踏み込んだ実質的な評価に移る。第1の点に

ついでにのべる。申請者はフッサールの初期の公刊された主著『イデーンⅠ』の刊行直後から書き進められたが、長い間未公刊にとどまり、戦後初めて刊行された『イデーンⅡ』のなかにある純粹自我の思想に注目して、『イデーンⅡ』ではすでに『イデーンⅠ』が乗り越えられているということを発見した。この発見は詳細なテキストの分析と解明を基礎にして遂行されており、フッサール現象学の研究分野で新しい知見を呈示している。第2の点では、これまでフッサールの時間論が身体論と関連付けられて論究されることは極めてまれであった。たとえばいまでもフッサール現象学の古典的な研究であり、戦後の現象学研究の「最大の収穫」といわれたクラウス・ヘルトの『生き生きした現在』においても時間を自我の深層構造に再発見しているだけであり、空間や身体と関係付けられてはいない。申請者は最近の研究成果をも考慮して自我論を身体と時間論とにたくみに関連付けている。そしてこれは自我の深層における同一性に関わるものとしての「匿名的な原身体性の次元」を再発見した。これは発生的な現象学のひとつの成果として高く評価できる。

第3に自我の同一性や同一性の意識との関連で真理と誤謬について論じている。これは究極的には過去の私と現在の私との間の超越論的な偶然の次元を開示しており、実存の問題や自我の問題を人間存在の根底に見出せるものとしている。

なお本論文の第一章は関西哲学会大会で発表の折に高く評価され、詳細に拡大化して論じた論文が学会誌『アルケー』に掲載された。

このような自我と時間、身体、超越論的偶然の次元を開示する本論文は、人間存在の根本を解明しており、地球環境学の一翼を担う人間環境共生基礎論分野における人間の自己理解を明らかにしている。人間存在は地球環境学の本質的な契機であり、これにより本論文は地球環境学の発展に大きく貢献した。

よって本論文は博士（地球環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成20年2月1日、論文内容とそれに関連した事項についての試問を行った結果、合格と認めた。